

6/13 Tue.

第629回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.629 / Suntory Hall 19:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner

チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

アタイル
ATTAHIR

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

鈴木優人 (指揮者／クリエイティブ・パートナー) -p.5
MASATO SUZUKI

ジャン＝ギアン・ケラス -p.8
JEAN-GUIHEN QUEYRAS

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

チェロ協奏曲〈アル・イシャー〉(日本初演)
[約30分] -p.11
Cello Concerto "Al Icha" (Japan Premiere)

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55〈英雄〉[約47分] -p.13
Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 "Eroica"
I. Allegro con brio
II. Marcia funebre: Adagio assai
III. Scherzo: Allegro vivace
IV. Finale: Allegro molto

6/17 Sat.

第258回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.258 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

6/18 Sun.

第258回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.258 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ショパン
CHOPIN

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ケレム・ハサン -p.6
KEREM HASAN

エリック・ルー -p.8
ERIC LU

長原幸太
KOTA NAGAHARA

歌劇〈スペードの女王〉序曲 [約4分] -p.15
"The Queen of Spades" Overture

ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21 [約32分] -p.16
Piano Concerto No. 2 in F minor, op. 21
I. Maestoso
II. Larghetto
III. Allegro vivace

交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] -p.17
Symphony No. 5 in E minor, op. 64
I. Andante – Allegro con anima
II. Andante cantabile, con alcuna licenza
III. Valse: Allegro moderato
IV. Finale: Andante maestoso – Allegro vivace

※当初発表した出演者を一部変更しております。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

6/28 Wed.

第663回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.663 / Suntory Hall 19:00

6/29 Thu.

非破壊検査 presents 第35回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.35, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

7/2 Sun.

第127回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.127 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano

コンサートマスター
Concertmaster

ラフマニノフ
RACHMANINOFF
《生誕150年記念》

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

アレクサンダー・ソディ -p.7
ALEXANDER SODDY

反田恭平 -p.9
KYOHEI SORITA

長原幸太
KOTA NAGAHARA

ピアノ協奏曲 第3番 二短調 作品30 [約39分] -p.19
Piano Concerto No. 3 in D minor, op. 30
I. Allegro ma non tanto
II. Intermezzo: Adagio - III. Finale: Alla breve

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36 [約44分] -p.20
Symphony No. 4 in F minor, op. 36
I. Andante sostenuto - Moderato con anima
II. Andantino in modo di canzona
III. Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
IV. Finale: Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：非破壊検査株式会社 (6/29)
協力：コジマ・コンサートマネジメント (6/29)、横浜みなとみらいホール (7/2)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会 (6/28)

指揮

鈴木優人
(指揮者/クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner

革命児マサトが振る
鮮烈なる〈英雄〉



©読響

マルチな才能で新時代を切り開く気鋭・鈴木優人が、古典派の音楽と現代作品を組み合わせ、クラシック音楽の“現在”を問うプログラム。ベートーヴェンのスコアを新たに見つめ直し、作品の揺るぎない革新性を露わにする。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとの「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演。22年4月にはドイツ・ハンブルク響と共演、23年3～4月には名門オランダ・バッハ協会に客演し、J. S. バッハ〈マタイ受難曲〉(全13公演) を指揮した。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務め、NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演するなど、活動は多岐にわたる。芸術選奨文部科学大臣新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞など受賞多数。20年4月から読響の指揮者/クリエイティブ・パートナーとして多くの公演を指揮するほか、《アンサンブル・シリーズ》をプロデュースして好評を博している。23年4月から関西フィル首席客演指揮者を務めている。九州大学客員教授。

6/13
定期

Maestro

6/17
土曜マチネー

6/18
日曜マチネー

Maestro

指揮

ケレム・ハサン

KEREM HASAN, Conductor

“未来の巨匠”が振る 珠玉の名曲選



©MarcoBorggreve

欧州で目覚ましい活躍を見せて注目を浴びるイギリスの鬼才ケレム・ハサンが読響に初登場。チャイコフスキー屈指の人気交響曲で切れ味鋭いタクトを披露し、壮大なスケールの音楽を作り上げる。

1992年イギリス・ロンドン生まれ。スコットランド王立音楽院でピアノと指揮を学び、スイスのチューリヒ芸術大学などで研鑽を積む。ロンドンで開催されたドナテッラ・フリック指揮コンクールのファイナリストとして注目を浴び、2017年ネスレ&ザルツブルク音楽祭指揮者コンクールで優勝。巨匠ハイティンクに招かれ、シカゴ響やバイエルン放送響にアシスタントとして同行し、18年にはハイティンクの代役としてロイヤル・コンサートヘボウ管を指揮し一躍脚光を浴びた。19年にはガッティの代役として同楽団のツアーにも同行し、成功を収めた。

オーストリアのチロル交響楽団の首席指揮者を19年9月から務めており、現在4シーズン目を迎える。これまでにロンドン響、バイエルン放送響、ロイヤル・フィル、BBC響、ドレスデン・フィルなど欧州の楽団に客演するほか、22年夏にはアメリカ・デビューを飾り、ミネソタ管、デトロイト響、ユタ響にも客演するなど、活躍の場を広げている。オペラ指揮者としても頭角を現しており、ウェールズ・ナショナル・オペラでヴェルディ〈運命の力〉を、イングリッシュ・ナショナル・オペラでモーツァルト〈コジ・ファン・トゥッテ〉を、チロル州立歌劇場でサン＝サーンス〈サムソンとデリラ〉などを指揮し、いずれも成功に導いたほか、グライントボーン音楽祭ではモーツァルト〈魔笛〉を指揮し、好評を博した。

指揮

アレクサンダー・ソディ

ALEXANDER SODDY, Conductor

イギリスの俊英が振る チャイコフスキー



©Christian Kleiner

ウィーン国立歌劇場など世界の一流歌劇場で活躍し、マンハイム国立劇場の音楽総監督を務めた俊英ソディが読響に初登場。チャイコフスキーの交響曲第4番で力強いサウンドを引き出し、興奮のフィナーレを築きあげる。

イギリスのオックスフォードに生まれ、王立音楽院とケンブリッジ大学、ロンドンにある国立オペラ・スタジオで学ぶ。2010年から12年までハンブルク国立歌劇場の指揮者（カペルマイスター）を、13年から16年までクラゲンフルト市立劇場の首席指揮者を務めた後に、16年から23年までマンハイム国立劇場の音楽総監督や同劇場のアカデミーコンサートの首席指揮者を務めた。ワーグナー〈トリスタンとイゾルデ〉、ヴェルディ〈アイダ〉、ブリテン〈ピーター・グライムズ〉など、幅広いレパートリーを指揮して高い評価を得た。近年では、メトロポリタン歌劇場でプッチーニ〈蝶々夫人〉を指揮し成功を収めたほか、英国ロイヤル・オペラでR.シュトラウス〈サロメ〉やワーグナー〈タンホイザー〉、ウィーン国立歌劇場でR.シュトラウス〈エレクトラ〉、ベルリン国立歌劇場でR.シュトラウス〈ばらの騎士〉、バイエルン国立歌劇場でモーツァルト〈魔笛〉を指揮するなど、欧米を中心に活躍している。

コンサートでは、フィルハーモニア管、ニュルンベルク州立フィル、ミュンヘン放送管、王立スウェーデン管、ノルウェー国立歌劇場管、バレンシア管、アトランタ響、ボーンマス響などに客演。今夏にはコペンハーゲン・フィルとデンマークのチボリ・フェスティバルに出演を予定している。

6/28
名曲

6/29
大阪定期

7/2
横浜マチネー

Maestro

6/13
定期

Artist



©Artūrs Kondrāts

チェロ

ジャン＝ギアン・ケラス

JEAN-GUIHEN QUEYRAS, Cello

現代作品も数多く手掛け、幅広いレパートリーで意欲的な活動が続ける世界的チェリスト。1967年カナダ・モントリオール生まれ。ウィーン楽友協会、ウィグモアホール、カーネギーホールなど欧米各地でリサイタルを開催している。また、ブーレーズ、ノリントンら巨匠の指揮でパリ管、ウィーン響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管などの一流楽団と共演。アルカント・カルテットのメンバーを務めるなど、室内楽奏者としても活躍している。数多くのCDをリリースし、高い評価を得ている。楽器は1696年ジョフレド・カッパ製（メセナ・ミュージカル・ソシエテ・ジェネラルより貸与）。現在、フライブルク音楽大学教授。読響とは2016年にデュティユーのチェロ協奏曲〈遙かなる遠い世界〉、19年にリゲティのチェロ協奏曲で共演し絶賛された。



©Yuji Ueno

ピアノ

反田恭平

KYOHEI SORITA, Piano

2021年のショパン国際コンクールで第2位を受賞。クラシック音楽界に革命をもたらすカリスマ。モスクワ音楽院を経て、ショパン音楽大学で学び、ウィーンでは指揮の勉強もしている。12年日本音楽コンクール優勝。15年ロシア国際音楽祭でマリンスキー劇場にデビュー以降、N響、都響など国内の主要楽団や、ミュンヘン・フィル、ベルリン・ドイツ響、ロシア・ナショナル管、ワルシャワ国立フィル、RAI国立響などと共演。自身が創設したジャパン・ナショナル・オーケストラで全国ツアーを開催するほか、新レーベル「NOVA Record」を設立。20年にはウィーン楽友協会にデビュー。TBS系テレビ「情熱大陸」、テレビ朝日「徹子の部屋」「題名のない音楽会」など多くのメディアに出演。第27回出光音楽賞受賞。読響とは18年以来、共演を重ねている。

6/28
名曲6/29
大阪定期7/2
横浜マチネー

Artist

6/17
土曜マチネー6/18
日曜マチネー

Artist

2018年リーズ国際コンクールで優勝し、国際的に活躍する新星ピアニスト。1997年アメリカ・マサチューセッツ州生まれ。2015年、17歳の時にショパン国際コンクールで第4位入賞し、一躍注目を浴びた。17年にはドイツ国際ピアノ・アワードを受賞。これまで世界の主要ホールでリサイタルを開くほか、ムーティ指揮シカゴ響、オルソップ指揮ロンドン響をはじめ、ロサンゼルス・フィル、フィンランド放送響、BBCフィルなどと共演。23年4月には、ボストン響の定期公演にデビュー。録音では、専属契約を結ぶワーナー・クラシックスから20年に「ショパン：24の前奏曲」をリリースし、「BBCミュージック・マガジン」の年間最優秀器楽アルバム賞を受賞。最新CDはシューベルトのソナタ集。読響初登場。



©Ben Ealovega

ピアノ

エリック・ルー

ERIC LU, Piano

アタイル

チェロ協奏曲〈アル・イシャー〉(日本初演)

フランス南部トゥールーズ出身の作曲家バンジャマン・アタイル(1989～)は、レバノンの首都ベイルートにルーツを持つ。チェロ協奏曲〈アル・イシャー〉には、作曲家のそうした多文化性が色濃く反映されている。

2015年ごろから本格化した作曲活動は、17年に大きな山場を迎えた。1日5回のイスラム教の祈りを、一連の音楽作品としてシリーズ化する企画を始めたのだ。きっかけはダニエル・バレンボイムとブーレーズ・アンサンブルによる作品委嘱だった。

バレンボイムがアタイルにほぼ無条件で作曲を任せたので、作曲家自身は少し困惑したようだが、すぐに先述のアイデアにたどり着いた。それを引き出したのは、ベイルートで聞いたムアッジンろうしやうしやの声だったという。ムアッジンはイスラム教の祈りの時を知らせる朗読者。モスク(イスラム寺院)の尖塔からアザーンを吟じ、礼拝への参加を呼びかける。アラブ諸国やトルコ、インドネシアなど、イスラム圏の街で頻繁にその声を聞くことができる。最近は録音をスピーカーで流すことも多いが、かつてはよく通る甲高い肉声でその都度、アザーンを詠じていた。

アタイルは夜明けの呼びかけ「ファジュル」(アッラーは偉大なり……救済のために来たれ……。礼拝は睡眠に優る……アッラーのほかに神はなし)を耳にして目を覚まし、シリーズ化の構想を胸に抱いたらしい。ファジュル(未明)、ズフル(明け方)、アスル(午後)、マグリブ(日没後)、イシャー(夜)の5度の礼拝を、1曲ずつ音楽にするプロジェクトがここにスタートする。

まずバレンボイムの委嘱に応じてピアノ協奏曲〈アル・ファジュル〉、続いてアロド四重奏団のために弦楽四重奏曲〈アル・アスル〉、そしてリール国立管弦楽団の委嘱によりセルパン協奏曲〈アズフル〉を書き上げた。いずれも17年のことだ。20年に入り、アメリカの美術館ザ・フィリップス・コレクションのためにオーボエ無伴奏曲〈アル・マグリブ〉、ラジオ・フランスの委嘱に対してチェロ協奏曲〈アル・イシャー〉を作曲した。これで祈りのサイクルが閉じたことになる。

作曲家はチェロ協奏曲について次のように語る。「(夜中の礼拝にあたる)〈アル・イシャー〉は深く暖かい夜へと飛び込む作品」「その日を締めくくる最後の呼びかけ」

にあたる。それにより「(今日という) あるひとつの感覚、ひとつの色彩から、(明日という) また別の感覚、別の色彩へと移ろっていく」。アタイル自身は作品をこのように捉えた。

こうした未来志向は、音楽上の構成にもあらわれている。作曲家はこう言う。「音楽によく耳を傾けると、忘れかけていたイディッシュ (中・東欧ユダヤ文化) の旋律、夢のようなグレゴリオ聖歌のクラウドラ (単旋聖歌を多声化した内の一声部を独立させたもの)、街の四方に余韻を残すムアッジンのアザーンが聞こえる」。「ひとりは大勢、大勢はひとりへと移り変わり、(イディッシュ、クラウドラ、アザーンの) 三者が融合する」。つまり作曲家はこの作品で、(啓典を共有する) ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の合一する“明日”を夢見ている。これは、レバノンにルーツを持つフランス生まれの作曲家という多文化的性向を、健全な楽観主義のもと音楽に埋め込んでいるということだろう。

曲は単一楽章。四分音符毎分58回の部分を中心としたまとまりを4度、演奏する(「テンポ・プリモ (冒頭のテンポに戻す)」の指示が3回ある)。これは「(ムアッジンが)『アッラーは偉大なり』の宣言を4回繰り返す」ことに起因している。この4回を作曲家は「つねに同じ時間であり、つねに新しい時間である」とする。

チェロの低・中・高音域はそれぞれ、イディッシュの旋律、クラウドラ、アザーンに対応しているようだ。とくにその高音域は、往時のムアッジンの甲高い声を想起させ、興味深い。結尾部では、独奏・総奏ともに低い音域から高い音域へと上行を繰り返し、三者の融合を印象づける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2020年／初演：2021年2月6日、パリ／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2 (アルトフルート持替、ピッコロ持替)、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2 (バスクラリネット持替)、ファゴット、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器 (太鼓、フレームドラム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、クラッシュ・シンバル、チャイニーズ・シンバル、シズル・シンバル、グロックンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、銅鑼、クロテイル、ダラブッカ)、ハープ、ピアノ、弦五部、独奏チェロ

ベートーヴェン

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉

「英雄」とは誰を指すのか。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827) は〈英雄〉作曲のきっかけをフランス軍の元帥ジャン＝バティスト・ベルナドットから得た、と“伝記作家”のシンドラーは言う。総譜にナポレオン・ボナパルトへの献辞が添えられたことから、この稀代の革命家こそ「英雄」だとする考えもある。

楽曲の構成の点から「英雄」の正体に迫ることもできる。鍵は数字の「3」だ。「英雄」はベートーヴェンの3番目の交響曲、変ホ長調で調号はフラット3つ、始まりは4分の3拍子、異例の楽器編成であるホルン3本。「英雄」には「3」がちりばめられている。

19世紀初めのウィーン市民が「3」と聞いて思い浮かべるのは、まず「フリーメイソン」だろう。自由・平等・友愛の旗印はもちろん、三角形に3つの目と、象徴的な「3」には事かかない。フランス革命を候補に挙げてよい。自由・平等・博愛の3つの理想を掲げ共和主義を追求した運動に、ベートーヴェンは共鳴した。だから第3番の「英雄」とは、革命を成し遂げた市民だと言っても、あながち間違いではない。

^{がいぜんせい}蓋然性が高いのは、キリスト教の「三位一体」である。音楽修辭学の伝統に従えば、変ホ長調の3つのフラットは、父・子・聖霊の三神格を示す。わざわざホルンを3本使うことも興味深い。加えて注目すべきはその配置だ。通常ならば1番・2番・3番 (3番・2番・1番) と座る。しかし、ベートーヴェンは1805年、浄書譜の扉に「3本のホルンは第1奏者を中央に置く」と記した。これに従えば席順は2番・1番・3番 (3番・1番・2番) ということになる。メモだけでなく浄書譜そのものからこの配置がうかがえる。作曲家はホルンパートを上から、3番・1番・2番の順で書いた。この席順の見た目は、三位一体または磔刑の図像表現を強く思わせる。

この観点から各楽章を眺めると、興味深い関係が見えてくる。ユダヤ教に波乱を起こした布教活動、ゴルゴタへの道行と十字架上の死、復活と昇天。キリストの生涯がうっすらと浮かび上がる。「英雄」はキリストを指しているのではないか。もちろんこれはファンタジーなのだが、それなりの根拠に基づいている。仮説のひ

とつとしてもよいだろう。

ベートーヴェンは交響曲を、貴族や資産家の邸宅で演奏することがあった。1804年の初夏、〈英雄〉をウィーンのロプコヴィツ侯爵邸で試演した後、同年夏にチェコ・ロウドニツェのロプコヴィツ城で私的に初演した。さらに翌年1月、ウィーンの銀行家ヨーゼフ・フォン・ヴュルトの邸宅での演奏会でも披露する。

次の批評は05年のヴュルト邸演奏会の様子を伝えている。「この作品ではどぎつさや奇抜さが余りにもしばしば見られ、そのことによって見通しが極めて難しくなり、統一がほとんど失われている」（『総合音楽新聞』1805年2月13日号）

引用部分の前段でも「長い」「演奏が難しい」「無秩序」と散々の書かれようだが、逆にこの作品で、ベートーヴェンが従来の交響曲の概念をひっくり返してしまったことがよく分かる。批評家は〈英雄〉に否定的な見方をしているが、「大変な喝采を受けた」という記録もあり、耳新しさを喜んだ聴衆もいた。

第1楽章、延々と続くヘミオラ（小さな3拍子2つを大きな3拍子1つと取るギアチェンジ）には演奏者ですら参ったとの報告が残る。作曲家の弟子フェルディナント・リースは、再現部直前、弦楽に主題が回帰する数小節前にホルンが“フライング”する場面を、ベートーヴェンの「意地悪」として回想している。

第2楽章は短短短長のリズムが耳を引く葬送行進曲。長調の中間部では、それを舞曲ジグ風長のリズムに衣替えさせて、推進力を保つ。

第3楽章のスケルツォでは名前の通り「冗談」めいた楽想が続く。その突然のギアチェンジなどが聴き手をまごつかせる。

第4楽章も変奏曲仕立ての興味深い構成。低音のテーマだけを示したあと、さまざまな横顔の変奏を続ける。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1803～04年／初演：1805年4月7日、ウィーン（公開初演）／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦五部

チャイコフスキー 歌劇〈スペードの女王〉序曲

19世紀ロシアを代表する作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、交響曲や管弦楽曲、協奏曲で知られているが、オペラにもかなりの力を注ぎ、11もの作品を作曲している。〈スペードの女王〉は、〈エフゲニー・オネーギン〉と並ぶその代表作。1888年の交響曲第5番から、バレエ〈眠れる森の美女〉〈くるみ割り人形〉などを経て、93年の交響曲第6番〈悲愴〉に至る生涯最後の傑作群の一角を占める作品でもある。90年、ペテルブルクのマリインスキー劇場の依頼で作曲され、12月同劇場にてナブラヴニークの指揮で初演された。初演は大成功を収め、チャイコフスキーも作品の出来栄に満足していたという。

内容は18世紀末の貴族社会にまつわる恋愛悲劇。ロシアの大文豪プーシキンいっかくの小説に基づく台本は、作曲者の弟モデスト・チャイコフスキーを中心に作成された。全3幕の物語は、「野心家の貧しい士官ゲルマンは、老伯爵夫人（＝スペードの女王）の孫娘リーザに身分違いの恋をし、一攫千金を夢見て“3枚のカードの秘密”を知る伯爵夫人に近づく。ところが老女は恐怖のあまり絶命。ゲルマンはその亡霊から秘密を聞き、言われた通りに賭けるも、最後の最後に負けて命を絶つ」といったもの。原作から改変されてはいるものの、オペラ自体は劇的な抑揚や明暗の対比が効果をあげる緊迫感に富んだ名作となっている。

ただし、抜粋される部分は少なく、序曲の単独演奏も比較的珍しい。だがこれは、4分弱の短い時間に悲劇的な内容が凝縮された、雄弁な音楽だ。

曲は、アンダンテ・モッソ、口短調。切ない心を映したクラリネットとファゴットの哀感漂うメロディで開始。緊張感を高めた後、付点リズムに乗って金管楽器が決然たる主題を奏で、激しく高揚する。さらに熱い情感のこもったメロディをもとにドラマティックな進行を遂げていき、静まりながら終結する。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1890年／初演：1890年12月19日、サンクトペテルブルク（オペラ全曲）／演奏時間：約4分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

6/17

土曜マチネー

6/18

日曜マチネー

Program Notes

ショパン

ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21

“ピアノの詩人”フレデリック・ショパン（1810～49）は、20歳の1830年11月に生地ポーランドを離れ、その後はパリでサロンを中心に活躍した。そうした経緯も相まって、オーケストラ付きの大規模な作品はすべてポーランド時代に書かれており、2曲のピアノ協奏曲は祖国を離れる直前に作曲された。

ワルシャワ音楽院卒業直後の1829年夏にウィーンを訪れて大評判をとったショパンは、さらなる国際的活躍を期して、万人受けする協奏曲の作曲を思い立つ。帰国直後の同年9月に作曲を始め、30年初頭にこの第2番を完成。3月に自身ソロを弾いて初演した。彼は次いで同年8月に第1番を完成し、10月に初演している。つまり本作はショパンの最初の協奏曲であり、番号の逆転は出版順に拠っている。

この曲は、初恋の人コンスタンツィア・グワドコフスカへの思慕が込められていることで名高い。彼女はワルシャワ音楽院の同級生でソプラノ歌手。友人への手紙で「理想の人を発見した。毎晩彼女の夢を見る」と吐露するほど恋した女性を「夢想しながら書いた」のが、本作の第2楽章である。だが間もなくの旅立ちは永遠の別れとなった。

曲は、^{みずみず}瑞々しい感性にあふれた、青春の記念碑と呼ぶにふさわしい音楽。通常の3楽章構成だが、比較的自由的な造作がなされ、美しい旋律と繊細かつ大胆なピアノリズムが全編に盛り込まれている。

第1楽章 マエストーソ 冒頭に弦楽器が奏する第1主題とオーボエが提示する第2主題を主体に進むドラマティックな音楽。ピアノは終始華麗なソロを奏でていく。

第2楽章 ラルゲット 甘美な主題を中心にした変イ長調の緩徐楽章。ノクターン風の主部にレチタティーヴォ風の間奏部が挟まれる。装飾音の多用も特徴的だ。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ マズルカ風の主題を軸にした流麗・軽快なフィナーレ。ホルンの信号から華々しい終結部へ移る。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1829～30年／初演：1830年3月17日、ワルシャワ／演奏時間：約32分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー

交響曲 第5番 ホ短調 作品64

交響曲第4番から約10年、国外滞在が多く、創作活動は若干停滞気味だったピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）だが、この間に西欧でブラームス、ドヴォルザーク、マーラーらと知り合い、近代的なオーケストラ演奏にも刺激を受けていた。そして1888年、好環境の村に居を構えたのを機に創作意欲が湧き上がり、3か月ほどで本作を完成。初演当初は批評家の評価が低かったものの、西欧を中心に支持を獲得し、ロシアの全交響曲の中でも屈指の人気作となった。

本作は、チャイコフスキー自身が第1楽章冒頭の旋律を「運命、もしくは神の摂理への完全な服従」と表現したことから、「運命」がテーマだと解釈されており、その旋律は「運命主題」と呼ばれている。主な特徴は、運命主題が“固定楽想”として各楽章に登場する点、第3楽章にワルツを用いている点、暗い運命主題が終楽章では長調に姿を変える点など。これらにはベルリオズの〈幻想交響曲〉の^{うかが}影響も窺えるが、全体をみれば、同作曲家ならではの歌とパッションと迫力にあふれた名曲だ。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ 最初にクラリネットで奏されるのが「運命主題」。主部は、歩むような第1主題とのびやかな第2主題を中心に、ダイナミックな展開を遂げる。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ ホルンのソロで出される主題を中心とした、甘美で陶酔的な緩徐楽章。だが、盛り上がりの頂点を運命主題が遮る。

第3楽章 ワルツ：アレグロ・モデラート ^{えんぴ} 艶美なワルツ主部に小刻みな動きの中間部が対比され、最後に登場する運命主題が夢気分を現実に引き戻す。

第4楽章 フィナーレ：アンダンテ・マエストーソ～アレグロ・ヴィヴァーチェ 長調の運命主題で始まる荘重な序奏から短調の主部へ移り、荒々しく刻まれる第1主題と木管で出される第2主題を中心に激しく進行。凱行進曲のような終結を迎える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1888年11月17日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

6/17

土曜マチネー

6/18

日曜マチネー

Program Notes

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第3番 二短調 作品30

ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、1909年秋、初めてのアメリカ演奏旅行に出かけた。フィラデルフィア、シカゴ、ボストン、ニューヨークの各都市でリサイタルを行い、オーケストラを指揮し、協奏曲のソリストとしても舞台に立った。ピアノ協奏曲第3番は、この演奏旅行のために書かれ、ラフマニノフ自身のピアノとダムロッシュ指揮のニューヨーク・フィルハーモニックによって初演された。

ピアノ曲の最高峰に数えられるこの協奏曲は、前作の第2番（1900～01）より至難な演奏技巧が要求される。ピアニスト最大の腕の見せどころとも言える第1楽章のカデンツァ、響きの厚い和音の連続で進められる終楽章、ピアノとオーケストラが一体となったエネルギッシュなコーダも迫力がある。もちろん技巧だけでなく、ラフマニノフの音楽の特徴である、スケールの大きな叙情や甘美なロマンティズムに溢れ、第2楽章の深々とした音楽も魅力的である。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント、二短調、4/4拍子 オーケストラに導かれ、ピアノがシンプルだが心を打つ第1主題を示す。ラフマニノフは否定しているが、ロシア民謡との関連が指摘され、夢見るような第2主題も民謡風である。2つの主題が展開し、ピアノの華やかなカデンツァを経て、短い再現部となる。

第2楽章 間奏曲：アダージョ、イ長調、3/4拍子 調号はイ長調だが、第1楽章から引き続き二短調で、オーボエから始まる哀愁を帯びた美しい旋律がつづられる。中間部（ピウ・ヴィーヴォ）はピアノが鮮やかな活躍をみせ、再び主部が戻り、終盤の勢いのまま切れ目なく終楽章に入る。

第3楽章 フィナーレ：アラ・ブレーヴェ、二短調、2/2拍子 ピアノがリズムカルな力強い第1主題を示す。やがて叙情的な第2主題が現れ、きらびやかに高音を輝かせ、ラフマニノフ特有の鋭いリズムで、生命力に満ちた音楽が前進する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1909年／初演：1909年11月28日、ニューヨーク／演奏時間：約39分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

6/28
名曲

6/29
大阪定期

7/2
横浜マチネー

Program Notes

6/28
名曲

6/29
大阪定期

7/2
横浜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）の交響曲第4番は、作曲家人生最大の危機とされる結婚騒動があった1877年から翌年にかけて作曲された。騒動の影響で精神は衰弱したものの、創作活動はきわめて充実していた。

「わが最良の友に」と献呈の辞が付された交響曲第4番は、大富豪の未亡人のメック夫人に捧げられた。チャイコフスキーの音楽に興味をもっていたメック夫人がいくつかの編曲を依頼したことをきっかけに、76年末から、手紙だけの、奇妙な付き合いが始まった。夫人から莫大な経済支援を受けたが、直接会うことはなく、2人の間には膨大な往復書簡が残された。そこには楽曲の内容や心情が細かく記され、チャイコフスキーの創作状況や心の内側を伝えるものになっている。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート、ヘ短調、3/4拍子～モデラート・コン・アニマ、9/8拍子 チャイコフスキーが「運命の動機」としたファンファーレが鳴り響く。主部は、憂鬱な感情に満ちた第1主題、クラリネットから始まる軽やかな第2主題が示される。2つの主題がドラマティックに展開され、ソナタ形式の節目でファンファーレが異様な緊張を伴って現れる。

第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ、変ロ短調、2/4拍子 ^{ひな} 鄙びた旋律がオーボエで奏される。中間部（ピウ・モッソ）は歯切れがよく、憂鬱な気分もいづらか晴れる。

第3楽章 スケルツォ：ピッツィカート・オスティナート：アレグロ、ヘ長調、2/4拍子 終始ピッツィカートで奏される弦楽器、素朴な木管合奏、弱音の金管主体の行進曲が対比させられる。作曲者によれば「気まぐれなアラベスク」。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・コン・フォーコ、ヘ長調、4/4拍子 激烈なロンド主題、ロシア民謡に基づく主題、陽気な主題が交互に現れる。最後は冒頭の「運命の動機」による威嚇をこれらの主題で一掃し、圧倒的な力で突き進む。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1877～78年1月9日／初演：1878年2月22日、モスクワ／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部